



肺がん化学療法 副作用マネジメント プロのコツ

倉田宝保, 吉岡弘鎮, 金田俊彦 編集

●B6 変型判 頁 396 2019 年 7 月

定価：本体 4,300 円＋税

[ISBN978-4-7583-1805-1]メジカルビュー社刊

わが国の死亡原因の第一位は悪性新生物(がん)であるが、そのなかでも肺がんが最も多い状況が続いている。肺がんの治療成績は不良で、特に薬物療法の対象となる進行肺がんの5年生存率は5%以下のきわめて悪い状況にあった。しかし、21世紀になって、非小細胞肺がん(NSCLC)に対するドライバー遺伝子変異をターゲットとした分子標的薬が開発され、さらに、免疫チェックポイント阻害薬(ICI)が登場して著しい進歩を遂げている。

肺がんの薬物療法の歴史を振り返ると3つの大きなエポックがあった。第一は1980年代初頭のプラチナ製剤(シスプラチン)の開発であり、第二は2002年のEGFRチロシンキナーゼ阻害薬に始まる各種分子標的薬の開発、そして第三が2014年のICIの登場である。細胞障害性抗がん剤の時代が長らく続き、治療レジメンの選択も小細胞肺がん(SCLC)とNSCLCに分けるだけで、毒性(副作用)も抗がん剤の種類によって多少の差はあるものの、血液毒性、消化器症状、脱毛などが中心で、大きな違いはなかった。しかし、ドライバー遺伝子変異阻害薬の開発、ICIの出現によって、NSCLCの治療戦略は大きく変貌し、大変複雑になり、副作用対策も難しくなっている。個々の症例に最適な治療を選択し、最良の結果を得るためには、治療開始前から治療中、治療後において、的確な判断・対応が求められており、担当する者の能力が問われるようになっていく。まさに本書は、“プロのコツ”とされているように、肺がん治療を担当する医師、看護師、薬剤師らがプロとしての実力を発揮する一助になる書といえる。

本書の内容についてみると、第I章に「肺がん治療体系概略」が記載されており、SCLCとNSCLCの治療体系、それぞれの薬物療法の歴史から始まり、そのうえで、近年目まぐるしく変化するNSCLCの治療戦略をわかりやすく示しており、日常診療において、それぞれの患者さんの治療戦略を立てる場合に大変参考になると思われる。

第II章では、「レジメン別プロのコツ」として、術後補助療法からIV期NSCLCに用いる化学療法、SCLCの治療レジメンまで肺がんの治療で使用するすべてのレジメンについて、治療開始前に実施すべき処方や処置、副作用の発現時期とそれを見つけるコツ、副作用が出た場合の減量、休薬の仕方、治療再開のコツを記載している。

第三章は「副作用症状別プロのコツ」として、それぞれの副作用の内容説明、原因となる薬剤、休薬すべき薬剤、リスク因子、対処方法などに多くの紙面を割いており、本書の重要な部分となっている。特に、分子標的薬やICIの場合には、肺がんの治療を担っている医師がこれまであまり経験してこなかったような有害事象にも遭遇することがあり、それらに的確に対応できるよう記載されており大変参考になる。

第四章は、「肺がん化学療法との上手なお付き合い」として、アピアランス(外見)ケア、心のケア、意思決定支援、抗がん剤の曝露対策などを示しており、実臨床で大変参考になる。

最後の第V章では、「肺がん化学療法をうまくこなすコツ：上級編」として、ドライバー遺伝子変異陽性肺がん、遺伝子変異のない非扁平上皮がん、扁平上皮がん、小細胞がんなどについて、それぞれの治療のコツを要点よくまとめている。

本書は、肺がん治療を積極的に実施している施設で、実際に治療を担当されているプロの医師、看護師らが、自分たちの経験に基づいて執筆されており、実際の臨床の現場で直ちに役に立つ内容となっている。患者さんを前にして、治療内容、前処置、投与量やスケジュールの再確認、治療中の副作用のチェック・対応の仕方、投与量変更の必要性などそれぞれの時点で大いに参考になる。

肺がんの治療は大変複雑になっているが、最適な治療を選択し、的確なマネジメントによって、最良の結果に結び付けることが重要であり、そのための座右の書として本書を活用されることをお勧めしたい。